

博士學位論文要約

論文題目: 制御焦点が課題への取り組みの粘り強さに与える影響とその効果量の推定

氏名: 長谷 和久

要約:

本論文は、個人の目標志向性を 2 種類—予防焦点 (prevention focus) と促進焦点 (promotion focus)—に大別する制御焦点理論 (Regulatory focus theory) を基礎に、制御焦点の差異と課題に対する粘り強さの関係性について明らかにすることを目的としたものである。制御焦点理論とは、ヒトを含めた生物一般が有する快に接近し、不快を避けるという快楽原則 (hedonic principle) を基礎にして Higgins (1997) によって提唱された。制御焦点理論では、従来 of 動機づけに関する理論のように快をもたらす状態への接近に関する動機づけか、それとも不快をもたらす対象からの回避に関する動機づけか、によって人の目標志向性を区別するのではなく、接近対象と回避対象の質的な違いにもとづいて目標志向性を特徴づけている。詳細には、獲得の存在に接近し、獲得の不在から回避する促進焦点と、損失の不在に接近し、損失の存在を回避する予防焦点によって人の目標志向性を特徴づける。本稿では、研究 1 から研究 6 までの各研究をとおして制御焦点理論に関する先行研究の追試可能性 (研究 1)、制御焦点理論の視座に立って研究を行うことの意義 (研究 2)、そして制御焦点の差異が創造性課題や自由再生課題に対する粘り強さに与える影響 (研究 3-6) について検討を行った。

本論文は 5 章から構成される。第 1 章では仮説的構成概念としての制御焦点について、従来までの接近・回避動機づけシステムとの共通点と相違点を明確にすることで、制御焦点の実態について明らかにした。次に制御焦点の差異が心理的・行動的側面に対してどのような影響をもたらすのかについて、先行研究のレビューを通して明らかにした。こうしたレビューにより、制御焦点の差異は選好形成や意思決定、道徳的行動、説得といった多様な側面に影響を及ぼすことを示した。また、制御焦点に関連するこれまでの研究では、促進焦点は新奇な刺激への開放性をもたらし、創造的パフォーマンスに対して肯定的な影響をもたらす一方で、先行する解答に引きずられる傾向が強い予防焦点は創造的パフォーマンスに対して否定的な影響をもたらすことが頑健性の高い知見として繰り返し示されていた (たとえば, Friedman & Förster, 2001)。これを受け、本論文の研究 1 では先行研究とは異なる方法で制御焦点を操作した後に創造性課題 (Unusual Uses Test) を実施し、先行研究の概念的追試を試みた。その結果、創造的パフォーマンス指標において、制御焦点を操作したことによる影響が見られないものもあったが、一部の指標では予防焦点が促進焦点よりも創造的パフォーマンスを低下させることが明らかになり、先行研究と整合する結果を得た。次に研究 2 では、目標フレーミング効果の文脈において、従来までの研究で指摘されてきた説得的メッセージの感情価だけでなく、制御焦点理論において重要視され

る利得と損失への焦点化がメッセージの説得効果を決定する要因であることを示した。こうした研究 2 の結果から、制御焦点理論の視座に立った上で研究を行うことにより、人の心理的特徴についてより詳細に記述できる可能性を示した。

第 2 章では、課題に対する粘り強さを左右する要因を検討することの意義、ならびに、粘り強さに影響する要因として制御焦点を取り上げることの重要性について説明した。そして、なぜ制御焦点の差異が課題に従事する際の粘り強さをもたらすと予測しうるかについて先行する知見をもとに論じた。この際、熱望方略を採用する促進焦点に比べて、警戒方略を採用する予防焦点は、課題に対する粘り強い取り組みをもたらす可能性があるとの結論し、予防焦点が促進焦点よりも粘り強い取り組みをもたらすとの仮説 1 を提起した。さらに、粘り強い取り組みが可能な条件下では、予防焦点の個人は不得手とする創造性に関連する課題のパフォーマンスを高めるとの知見、さらには促進焦点よりも高い学業パフォーマンスをもたらすとの先行研究に基づき、予防焦点の個人は、促進焦点の個人に比べて、粘り強い取り組みによって課題パフォーマンスを高めるとの仮説 2 を立てた。

第 3 章では、創造性課題である日本語版遠隔連想テストを時間的制約を設けずに実施することで仮説 1 と仮説 2 について検討を行った。第 3 章で実施した研究 3-5 により以下のことが明らかになった。すなわち、特性と文脈の制御焦点の両者を検討対象にした研究 3 では、文脈の制御焦点の操作が粘り強さと課題成績に影響するという結果は確認できなかったが、特性としての予防焦点傾向が促進焦点傾向に比べて相対的に強くなるほど、課題に粘り強く取り組む可能性が示された。さらに、文脈の制御焦点を操作しないで、特性の制御焦点にのみ着目した研究 4 では研究 3 と同様に、予防焦点傾向が相対的に強くなるほど粘り強く課題に取り組むことが示された。また、研究 3 で使用された制御焦点の操作に加え、制御焦点に対応する明示的な目標を与える厳格な制御焦点の操作方法を用いた研究 5 では、予防焦点を強める操作が、促進焦点を強める操作に比べて、粘り強い取り組みをもたらすことが明らかになった。加えて、研究 5 ではそうした粘り強い課題への取り組みによって、予防焦点の個人は日本語版遠隔連想テストの成績を向上させる可能性が示された。

第 4 章では、第 3 章で使用された創造性課題とは質的に異なる課題を用いることで、知見の一般化可能性について検討した。具体的には、創造性課題のように未知の情報の検索を必要とせず、既知の情報の検索のみが必要とされる自由再生課題を使用した研究 6 の結果に基づき仮説 1, 2 を検討した。研究 6 から、予防焦点は促進焦点に比べてより長く自由再生に時間を費やし、その結果として記銘した単語の再生数が上昇することが明らかになった。すなわち、自由再生課題を用いた研究 6 では、仮説 1 と仮説 2 はともに支持された。

最終の第 5 章では、第 3 章と第 4 章で得られた結果について記述的にまとめるとともに、研究 3-6 までの成果を総合した上で小規模メタ分析を実施し、本稿で立てた仮説 1 と仮説 2 の確からしさについて検討を行った。メタ分析の結果、制御焦点の差異は課題に対する粘り強さに対して、有意な小から中程度の効果量をもって影響することが確認され、予防焦点は促進焦点に比べて課題に対して粘り強く取り組むことが改めて確認された。さらに、課題パフォーマンスに対しても小さいながら有意な効果量が確認され、粘り強く課題に取り組むことが可能な条件下では、予防焦点は促進焦点よりも優れた課題パフォーマンスをもたらす可能性が示された。すなわち、メタ分析の結果は仮説 1, 仮説 2 と整合するもの

であった。

このように、本研究では制御焦点の差異が課題に対する粘り強さに影響し、最終的には課題パフォーマンスの向上をもたらす可能性が示された。こうした知見は、教育場面や職場といった粘り強い取り組みが必要とされる環境において、粘り強さを高めるための効果的な介入や教示手法の提案につながり、さらには個人の制御焦点に応じた条件設定がその個人の潜在的なパフォーマンスを引き出すための重要な要因であることを示すものであった。このように本研究では、課題への取り組み時間という行動指標に基づき予防焦点が促進焦点よりも粘り強い取り組みをもたらすことを示したが、その背景メカニズムについて検討できていない。このため、将来的には、制御焦点理論に関する研究知見だけでなく、獲得状況と損失状況における人の価値判断傾向に関する研究知見を広く参照しつつ、なぜ予防焦点が促進焦点に比べて粘り強い取り組みをもたらすかについて明らかにしていく必要があるだろう。

引用文献

Friedman, R. S., & Förster, J. (2001). The effects of promotion and prevention cues on creativity. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 1001–1013.

Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist, 52*, 1280–1300.